

忘却された貨幣論*

～貨幣・金融システムの虚構性と現実性～

岡本 恵也[†]

目次

- I 現代貨幣システムの謎～貨幣の虚構性と芸術の虚構性～
- II マルクス学派貨幣理論の混迷～マルクスの葬送と復活～
- III 「システムマネー論」「イマジナリーマネー論」の擡頭
～貨幣システムの「虚構性」と「現実性」～
- IV マネー論からマネーキャピタル論へ
～貨幣・金融システムの「虚構性」と「現実性」～

I 現代貨幣システムの謎～貨幣の「虚構性」と芸術の「虚構性」～

最高度の印刷技術を駆使し、国民的偉人の肖像が表面を飾り、法貨という権威に裏付けられているとは言え、われわれが今日「お金＝貨幣」として実感しうる「銀行券」はしょせん、しょせん「神」ではなく「紙」ではないかという疑問は免れない。

金銀の重い鎧ははるか昔に脱ぎ捨てて、今やカジュアルな信用貨幣（銀行券、預金貨幣）の薄着に着替え、さらには一瞬に点滅する電子情報にまで貨幣形態は昇華したにもかかわらず、人は「貨幣」の「呪縛」から逃れることはできない。貨幣を追い求め、貨幣に恋いこがれ、貨幣に反発し、貨幣を嫌悪し、貨幣から逃避したいというこのアンビバレントな心的態度にこそ「貨幣物神」の謎は潜む。

「拝金主義」を批判する「道学的」非難や安っぽい評論で満ちあふれているジャーナリズムの喧しい声の中にも「拝金主義」の通奏底音が響いている。しかし、「貨幣の謎」を謎とも思わず、貨幣・金融システムの中に埋没している凡俗の大衆と違って、優れた芸術家は鋭い直観で「貨幣の謎」に原始的疑問を発信し続ける。アンディ・ウォーホールはかつてドル紙幣を並べた作品を作った。マルチ芸術家、芥川賞作家、赤瀬川原平の想像力、疑問力は自ら千円札を製造し、かつて名誉ある「千円札事件」を引き起こした。優れた芸術家は社会の核心、本質を衝く。「貨幣の謎」が今なお社会の根源的な謎であることを本能的に直観している。

先頃、新進気鋭の美術家、柳幸典は旧日銀広島支店の地下金庫室を舞台に砂で描いた巨

* 2007 年度日本金融学会秋季大会、報告論文。

† 熊本学園大学経済学部 okamoto@kumagaku.ac.jp

大な福沢諭吉、お札を額面にした切手、50ユーロ札を模した芸術作品を展示する現代美術の展覧会を主催した。貨幣をテーマにしたこの展覧会のモチーフは「日経新聞」が伝える柳幸典の言によれば、「紙に印刷しただけのものが、価値を持つ。錬金術性、虚構性において、貨幣とアートは似ている」、「貨幣は国家という権威がお墨付きを与え、人々が共通の認識をもって初めて機能する」という貨幣システムへの疑念にあるようだ。芸術家が「貨幣」と「芸術」の相似的な「虚構性」に関心をもち、貨幣は国家による「錬金術」ではないかと直感的なイメージをもつのも、むべなるかなである。

赤瀬川原平は言う、「人間の頭の中にはいろんな疑問がある。誰かに訊いてみたい疑問もあるし、訊いてもしょうがないと思っている疑問もある。疑問というのは、解決すると科学になるが、解決しない疑問は哲学となる。訊いてもしょうがないと思っている疑問は、ほとんど哲学なのだ。人間は死んだらどうなるか。この世の果てはどうなっているのか。時間というのは無限につづいていくのか。」(『ふしぎなお金』毎日新聞社、2005年。)

銀行券ですら芸術家の直観からすれば「疑問」を呈示するのに十分虚構であるのに、貨幣・金融システムの実体はクリック一押しで一瞬に点滅し、小額の金額から巨額の金額を移送し、決済する「電子決済システム」によってその「虚構性」をますます深めている。貨幣研究者は「哲学者」としてではなく「社会学者」として芸術家の鋭い疑問に答える責務を負う。

II マルクス学派貨幣理論の混迷～マルクスの葬送と復活～

マルクス学派の躓きの石は「貨幣は天然自然金である。」というマルクスの歴史的制約を反映する命題に呪縛されたことである。資本主義市場経済が存続する限りこの命題は永遠不滅の真理であると多くのマルクス学派が理解したことである。

したがって、1971年8月、時の米国大統領ニクソンによって、ドルの金兌換停止が宣言され、「名実ともに」貨幣制度から完全に金が放逐されたことは、マルクス学派に大きな衝撃を与え、この事態をどのように受け止め、自己了解するかという重い課題を突きつけられることになったのである。

マルクス学派の多くは金が貨幣制度から放逐されたことを歴史的現実として認めざるをえない。認めない勇気ある少数派も残存する。しかし、理論的には資本主義が資本主義である限り「貨幣は金でなければならない。」のであるから、「金」という軸点を喪失した、現存する貨幣制度は浮遊する不安定、不健全な制度であると見るしかないことになる。「金・ドル為替本位制」と言っても、金とドルはわずかに、かろうじて「対外公的兌換」に接点があるに過ぎなかったのだから、国際基軸通貨ドルに批判を集中して、十年一日の如く、いや百年一日の如く、「ドル危機論」を「国際金融システムの危機」時には声高に叫び、「国際金融システムの危機」の沈静時には裏声で呟くことになる。

この立場にたてば、資本主義体制は金からの離脱による貨幣制度の不安定化、不健全化

によって体制的危機を深め早晚崩壊に向かわざるをえないことになる。しかし、崩壊の兆しも見えず、まして「金本位制」への復帰も主張しえない以上、事実上「ドル本位制」を容認し、様々な体制支持的方法や国際協調によって資本主義はかろうじて体制的危機を回避しているだけだとの弁明がマルクス学派多数派のむなしき常套的弁明である。体制支持的方法や国際協調によってこの危機を回避できるのであれば体制的危機でも何でもない。まさに資本主義の自己調整能力である。マルクス学派多数派の立場は現実直視を回避した知的日和見主義の一形態である。

社会主義体制は幸いにも自壊し「反革命」の暴力による血に塗られた歴史を回避した。マルクス学派は「資本主義経済」も金からの離脱によって「プロレタリア革命」による血に塗られた歴史を幸いにも回避し自壊したと言わなければならない。そうであれば、現代の経済システムは何かと言う根本的歴史問題に対して、概念に厳密だと常々標榜するマルクス学派は何らかの理論的解釈を呈示しなければならない。しかし、マルクス学派は「貝になる」。マルクス学派は「隠れキリシタン」となり、「歴史分析」、「実証分析」に埋没する。ビジョン無き「歴史分析」に。マルクス学派は自壊する。

しかし、歴史の逆説ほど興味深いことはない。マルクスが予言し、待望した資本主義から社会主義、共産主義への移行という「唯物史観」の命題が完膚なく打ち砕かれたソ連邦を始めとする社会主義圏の崩壊が「不可逆」な歴史的現実になった今こそ、マルクスの分析視点、歴史的ビジョンが輝きを増している。「貨幣は天然自然金である」等という命題は、偉大なる古典、マルクス経済学の基本的論理からすれば「歴史的残滓」に過ぎない。マルクスの独自の分析視点は私的所有と社会的分業に不可避な「物象化」、「物神性」という「形態論」を分析視点に据えたことであり、彼の社会学者としての曇りなき歴史的洞察は、その呵責なき資本主義批判にもかかわらず「資本の文明化作用」という資本のダイナミズムに対する歴史的ビジョンにある。

古いマルクスを葬送し新しいマルクスが復活しなければならない。ゴルダゴの丘の峻厳な道を降りなければならないが。

Ⅲ 「システムマネー論」「イマジナリーマネー論」の擡頭

～貨幣システムの「虚構性」と「現実性」～

1 岩野貨幣論

マルクス学派に出自する岩野茂道、楊枝嗣朗は、「貨幣は金である」という「商品貨幣論」の劫火に包囲されながら貨幣理論に新しい歴史的地歩を切り拓いた。岩野の「システムマネー論」、楊枝の「イマジナリーマネー論」がそれである。岩野、楊枝理論はきわめて親和性が強く、「システムマネー論」と「イマジナリーマネー論」は、言わば「理論的雙生児」である。

岩野は戦後 IMF 体制下で 1 オンス = 35 ドルという公定価格と貨幣用金の取り扱いが有名無実化し、金がただ単に非貨幣用商品として各国中央銀行の準備資産の一つに過ぎなくなっている現状認識の下に「金廃貨論」を主張してマルクス学派から厳しい批判を浴びた。ニクソン宣言、変動相場制以前の国際通貨体制に未だ確たる方向も定まらず、不透明感が強かった時代の勇気ある、しかし確固たる主張であった。

岩野金廃貨論は決済メカニズムとしての「銀行システム」に着目することに裏付けられていた。岩野茂道は次のように言った（『金・ドル・ユーロダラー～世界ドル本位制の構造～』文真堂、1984年）。

「貨幣は、「信用貨幣」において、はじめてその中に自己のより成熟した姿を認めるものであり、信用 = 「負債」の中に自己の本質を見出すものようであった。したがって、われわれの観察に大きな狂いがなければ、「銀行貨幣」こそ貨幣のより発展した形態としなければならず、それは「信用関係」の成熟度の正の関数として定義されねばならない。

しかし、銀行貨幣が、支障なく流通するためには一つの基本的な条件が必要である。それは、銀行貨幣が、システム・マネーであるということからくる制約条件である。いうまでもないことだが、そのシステムの安定性がそれである。国内貨幣としての銀行貨幣が、無条件的な信頼を得ているのは、「銀行制度」が「最後の頼み」としての強固な中央銀行とその政府をもっているかぎりにおいてである。

貨幣が「銀行貨幣」としてその本質を完成しつつある現代金融においては、もしわれわれが貨幣をまず第一にシステム・マネーとして認識しなければ、貨幣現象の表面に幻惑され、正常な発展を危機とみたり、危機的症状を逆に安定とみたり、デフレをインフレと判断し、インフレをデフレと誤ったりすることがしばしば起こるのであろう。国内と国際とを問わず、「貨幣」に関する基本的な再検討が、このために必要とされる段階にきているように思われてならない。」（130ページ～）

銀行理論の専門家、銀行実務家であれば、企業間の高額の決済が預金貨幣の振替によって滞りなく行われている「銀行システム」の決済メカニズムを知らない者はいない。しかし、岩野ユーロダラー論が登場したときに、ロンドンにおけるユーロダラー取引の決済が NY のマネーセンター・バンクの預金貨幣の振替によって行われているということを理解するには少なからぬ想像力と高度な理解力が求められた。筆者が近年経験したヨーロッパの北端の地、オスロのレストランでの小額のクローネでの支払いにクレジットカードを利用し、帰国後間もなく地元の地方銀行の口座から間違いなく円預金残高が引き落とされていることに驚かなければ「銀行システム」を理解したことにならない。岩野「システム・マネー論」の画期は銀行システムがわずかばかりの、ありやなしやの、金属準備に支えられて機能しているわけではなく、銀行システム自体が経済取引、経済構造に立脚して

自立し、自律する成熟したメカニズムをもっていることを宣明にしたことである。もちろん、この「システム・マネー論」の原理は岩野自ら言うように、銀行学派の「真性手形理論」の発展である。銀行は自らの債務である預金貨幣を割引によって創造し、預金貨幣は振替によって決済手段として機能し、銀行への返済が預金貨幣によってなされることによって、銀行の創造された債務も消滅し、銀行の債務によってすべての債権・債務の関係は決済される。「還流の法則」である。岩野はこの銀行原理を国際レベルにまで拡張し、今や批判者も含めて国際経済、国際金融分析の枠組みとして共有財産となった「ドル本位制論」を打ち立てたのである。

岩野は戦後の国際通貨体制であるIMF体制の変貌、SDR、ユーロダラーに代表される国際金融システムの展開とともに常に新しい課題に真っ向から対峙してきた。岩野は近年、日本の「失われた10年」時の「公的資金の導入」という新たな金融システムの展開に刮目し、従来の「銀行原理」的信用貨幣説から、クナツ「貨幣論」の再評価を経て、また新たな「貨幣論」の構築に向かっているようである。彼は次のように言う（『貨幣と国家—クナツの銀行券について—』（『地域経済政策研究』第8号、「鹿児島国際大学大学院経済学会」2007年））。

「筆者は、これまで「ドル」を論じるとき、いわゆる「銀行原理」を国際レベル（オープンモデル）に拡大して説明してきた。歴史に比類のないドルの強さをバックアップするものは、金融機関も含めたアメリカ企業の巨大な国際展開力にあると記述してきたが、論理に大きな欠落があることを、若い友人達との議論から教えられてきた。国家、すなわちアメリカ連邦政府の力である。アメリカ連邦準備制度理事会に言及してもUSAそのものが明示的に（*explicit*）に導入されていない。考えてみると、国家との *divorce* を問題にしてユーロを論じながら、逆に金融機関に対する国家の強力な介入によってはじめて「失われた10年」から抜け出すことに成功し国際的に大きな教訓を与えたとされる日本の深刻な実験を目の当たりにしておきながらである。」（2ページ）

「銀行券は「信用貨幣」か、それとも「政府紙幣」かという銀行券論争を繰り返す心算はない。現代銀行券は「信用貨幣」でもなければ単純な「政府紙幣」でもない。法貨の地位を持つ真正正銘の「貨幣」であり、したがって政府発行の鑄造貨幣（コイン）と共に現金である。現代の貨幣統計では、最も厳しい統計分類でも貨幣をM1、つまり現金（銀行券+コイン）+要求払い預金としているが、厳密に言えば銀行預金は貨幣そのものではなく、貨幣として使用されることを待機している勘定（元帳）である。さて、クナツを論じる時、あまりにも有名な「貨幣国定学説」から彼を国家紙幣のみを分析の対象としていると曲解している向きがあるかもしれない。もちろんそんなことはない。「ドイツの帝国金庫証券および同様にオーストリーの政府紙幣は国家

の発行したるものである—しかし銀行券は国家によらず銀行によって創造せられ、しかして取引上に用いられる—したがってそれは国家的発行の性質はもっていない」と述べ、銀行とは「営利を目的とし、かつ精密に指示せられたる種類の取引を営む私的企業である」が、その営業内容は「本質上いわゆる割引業務と貸付業務に限定せられている」と説明する。ここまでは今日の銀行業に関するテキストと格別変わるところはない。さらに銀行業がいわゆる手形(Wechsel)の発生を前提として成り立つこと、手形とは「支払要具の単位にて、しかも(別段の明示なきときは常のように)本位的支払要具の単位にて呼ばれている債務証書にして、法律上全く特別の特権を付与せられたものである」としている。」(8ページ)

岩野の新説(?)は一考「両性具有的」である。「貨幣論」の視点から法貨(銀行券、硬貨)規定をどう見るか、中央銀行の主たる資産が「国債(国家債務)」であることをどう見るか、という問題を新たな次元で再考することを促しているのかもしれない。しかし、これらの問題は特に時代を画する新たな問題ではない。しかし、「金融機関に対する国家の強力な介入」、「公的資金の導入問題」は不問にできない、貨幣金融システムの議論に新時代を画するクリティカル・イシューであった。岩野は言う。

「国家の宣言を待ってはじめて不換銀行券の一般的流通が可能になったのではなく、銀行貨幣の本性からして、すなわち銀行券の発生と還流の循環メカニズム(いわゆる銀行原理)の働きそのものが、兌換の必然をなくしているからであって、国家の法制は単に事実関係の事後承認に過ぎないという考え方もあるかもしれない。」(11ページ)

岩野はこれまで常に金融問題の最前線のアクチュアルな問題に切り込んで、新たな解釈を大胆に呈示し筆者も含めて多くの研究者に大きな影響を与えてきた。岩野のこの新たな理論展開を「システム・マネー論」からの後退と見るか、新たな前進と見るかは今後の興味ある議論である。筆者は「公的資金導入」後の「現代貨幣・金融システム」も「銀行原理」を基底にしていると考えるが、しかしそうだとすると、岩野が銀行原理を国際経済に拡大したように、銀行原理は新たな経済構造の基に規定を拡大しなければならない。後に詳述するように、それは「マネー論」をベースにした「マネーキャピタル論」の構築である。

2 楊枝貨幣論

貨幣理論の研究者はマルクス学派に多かった。歴史や制度に関する深い興味、関心からである。社会主義の崩壊の如何にかかわらず、社会科学は歴史と制度を重視しなければ経

済学的含意をえることができないし、歴史に学ぶこともできない。その点から言えば、マルクス学派の貨幣理論研究は近年もっと活発に、かつ本質的議論が期待されるころだったが、基本的には「貨幣論は忘却されてきた」。忘却せざるをえなかったのである。「貨幣は金である」という非現実的な呪縛から逃れずして、現代の貨幣金融問題を根本的に分析することは不可能だからである。

楊枝嗣朗の貨幣論研究は自らの知的基盤であったマルクス学派の理論で、果たして現代貨幣を、さらには、国際通貨ドルを把握しうるのかといった痛切な問題意識に発していた。楊枝は近著で次のように言う（楊枝嗣朗『貨幣とは何か？—『歴史のなかの貨幣』序章—、佐大『経済学論集』第39巻大6号、2007年）。

「さて、今日、あらゆる貨幣取引が信用貨幣制度の内に取り込まれ、金兌換も停止され、国内はもとより国際間においても債権債務の決済に金支払いを必要としない。アメリカの国民通貨ドルが国際通貨として機能することによって、国際間のドル建て債権債務は、アメリカの銀行制度の内部で多角的に清算・決算される。1971年以来、名実共に貨幣商品金の流通が見られなくなって、貨幣がなんらかの価値物でなければならないといった認識はほぼ消滅したといえよう。もはや、金は貨幣ではなくなり、金の代替物でもないドルなり、円なりポンドなりの貨幣名称でもって、諸商品は、価値を直接に表現され、価格表現をもつ。「価値尺度として機能する貨幣は何等実態を必要」とせず、「貨幣呼称自体が貨幣である」と主張される世界が出現している。貨幣が抽象的な存在になっている現実の前に、私も含め、メタリズムを信奉する論者は言葉もなくし、貨幣論議には長く口を閉ざしてきた。貨幣論の再構築が求められて久しい。」（4ページ）

楊枝はマルクス学派の知的停滞、退嬰は『資本論』による歴史研究に淵源していると確信して、『資本論』に呪縛されることなく、歴史そのものの歴史研究へと向かい、そこに沈潜し、膨大な労作、力作をほぼこの4半世紀にわたって発表してきた。筆者もふくめその研究成果全体をフォローし、研究成果を咀嚼することは率直に言って容易ではない。楊枝は昨年2006年8月、ヘルシンキでの「国際経済史学会」の黒田明伸（東大東洋文化史研究所、教授）が座長を務めたセッションで自らの長年の研究成果を発表し高い評価をえた。楊枝の歴史研究は日本のマルクス学派の多くからは「ビナイネグレクト」の憂き目にあっているようであるが、国際的な歴史家の中では注目されるという日本の学会のよくある風景の中にある。このような風景を楊枝は自ら次のように描写する。

「内在的価値を持つ商品貨幣金こそが本来の貨幣であるとする貨幣理論では、いかなる貨幣制度の発展が見られても、新たな貨幣形態を商品貨幣金の代替物としか理解しない。そのためか、『資本論』やその草稿の精緻な原点解釈をすすめながらも、今日

の金との繋がりを欠いた貨幣現象やヨーロッパ共同通貨ユーロの出現という諸事実に当惑し、それらが自らの貨幣理論といかなる関連にあるのかといった考察は、無意識のうちに避けられてきたかに見受けられる。したがって、国際通貨論やユーロ研究が盛んに行われてきたにもかかわらず、その貨幣論的な考察はほとんどみられない。」(17ページ)

「楊枝貨幣論」はマルクス学派の商品金貨幣論、メタリズムから先駆的に離脱していた「岩野貨幣論」を継承するものであるが、「信用貨幣」の生みの親が商品貨幣・金であったことをも疑い、信用が鑄造貨幣に先行し、鑄造貨幣すら信用を身にまとう「国家債務」であると主張することによって商品貨幣論批判をより徹底させた。貨幣論における「システムマネー論」から「イマジナリーマネー」論へのコペルニクスの展開である。

「メタリズムの釘の掛け違いは、直接的商品交換の困難・矛盾から貨幣の発生・起源を説くアダム・スミス以来の常識、「貨幣結晶は、交換過程の必然的産物である」という主張にあった。しかし、歴史は商品交換や鑄貨の精製の遙か昔の古代バビロニア時代以前に、計算貨幣が存在していたことや、鑄貨が最初、商品交換のために鑄造されたものでもなかったことを教えている。重要な事実は、「信用 (credit) がインダストリー、銀行業、貨幣鑄造よりも歴史的に遙かに先行していた」ことである。「幾つかの大文明の記録された法の歴史は、信用の入念な規制とともに始まっている。」「信用は、経済活動のまさに最初期の局面から存在し、物々交換の発展以前にさえ実在したのであろう。……その後の一層の発展は、あらゆる返済に共通の尺度、すなわち、貨幣を生み出すことになった。」(20ページ)

そして、奇しくも、いや必然的に楊枝も岩野と同様にクナップを現代に甦らせる。岩野と楊枝のクナップ理解、解釈には少なからぬ齟齬があるやに思えるが、いずれにしても今後のクナップ研究は貨幣理論の深化に寄与すると思われる。

「以上の貨幣起源に関する理解は、100年も前に G.F.クナップによって主張されていた見解と重なる。「一国の貨幣を認識するには、一般的受領強制ではなく、公金庫に於ける受領を標準とすること。」「価値単位が……歴史的に定義されることに対する理由は、債務が存在しているという事実に存して居る。」「債務の名目性及び価値単位の名目性は、貨幣発生に対する必要な前提である。」「価値単位の名目性、従って又支払要具債務の名目性は、何等新しい現象ではなく、非常に古い現象にして、今日尚存続して居り且永久に存続するであろう現象である。」「然るに金属論者の説明し得ざるものは、金属なき貨幣組織である。表券論者は此貨幣組織を容易に説明する。而して彼は之を以て基礎理論の試金石なりと考えている。」(26ページ)

楊枝の『資本論』の商品貨幣論批判は、歴史的研究の深みの中からイマジナリ・マネーという抽象的貨幣を掬い出し、多くの理論的、歴史的成果を生み出した。そして、近年のインガム等、欧米の研究者によって支持されている。

「貨幣とは何か？」という根源的問いに対して、「貨幣は金でなければならない。」という認識ほど思考を遮断するものはない。「価値尺度機能は、その尺度自体が素材的に価値物である金以外にこれを果たすことはできない。この金の一定量に与えられた称号こそ「価格の規準」であるとの考え方は、メタリズム共通の認識である。」(岩野) アダム・スミスに代表される古典学派はもちろん、マルクスでさえ重「金」主義の呪縛から自由ではなかった。「金」の重みという歴史的制約性であろう。ローマの兵士が遠く蛮地に遠征、駐留する時には「金貨」を携帯しなければならなかった。マルチン・ルターも贅沢品や嗜好品と交換に金が国外流出するのを批判した。金は人々の最も普遍的な欲望の対象であるから、いつ、いかなる場所においても、いかなる財貨・商品とも「物々交換」可能な財・商品であった。

しかし、歴史家、黒田明伸『貨幣システムの世界史<非対称性>をよむ』(岩波書店、2003年)に明晰な歴史実証分析があるように、金は「普遍的富」であるからこそ逆説的に「貨幣」形態を担うにふさわしくないのである。金は常に最も高い「販売可能性」をもつ「普遍的商品」である。貨幣という形態はそれと最も遠い、対極的な「無価値の素材」に担われてこそ、貨幣としての形態規定にふさわしいのである。そうしてはじめて「貨幣物神性」が現実のものとなる。「楊枝貨幣論」の「イマジナリーマネー論」こそ「物象化」の極致であり、それは今日「電子情報(電氣的パルス)」に具現している。

金が「均質性」、「耐久性」、「合成・分割性」に優れているから、「貨幣は金である」とマルクスが断言したことが後世の貨幣理論家にとって最大の災厄であった。少量で高価な金は「小額貨幣」に不向きであり、高額の遠隔地取引の決済手段としては輸送コストが大き過ぎるのである。貨幣金は流通手段としては不適格である。マルクス学派は金、預金貨幣・小切手、銀行券には関心をもち、理論的考察に腐心してきたが、庶民の生活に不可欠な購買手段である小額貨幣は無視してきた。マルクス学派、進歩的インテリの大衆蔑視がはしなくも貨幣論研究に隠されていた。小額貨幣の舞台こそマルクスがいう「命がけの飛躍」、最終実現問題の舞台である。黒田の小額貨幣研究は「目からうろこ」である。江戸の職人は銀で賃金を受け取り、銅銭に両替して日常生活を営んでいた。銅銭の不足が庶民の生活を困窮させたことを直木賞作家、山本一力『銭売り賽蔵』(2005年、集英社)も描く。金であれ、銅であれ、素材が商品である限り、貨幣は供給の弾力性を欠き、いつの時代にも貨幣システムは混乱せざるをえなかった。商品貨幣の歴史がいかにおびただしい混乱と無秩序を繰り返したかを楊枝は詳細に実証分析している。

マルクス『資本論』のエッセンスは「物象化論」、「物神性論」である。しかし、マルクスは商品形態の「現実性」と貨幣形態の「虚構性」の対極的な形態上の差異に徹していな

かった。貨幣は社会的再生産を媒介する形態、手段である。財・サービスではない。スミスがいうように財・サービスでないものは富ではないのである。媒介する形態、手段は商品性を無化して「虚構性」に徹してこそその形態にふさわしい。貨幣システムは「虚構性」によってもっとも「現実性」を実現する。マルクの物象化論は「システムマネー論」から「イマジナリーマネー論」に進化して、「商品貨幣論」の暗闇からやっと脱することができたのである。しかし、貨幣システムという「虚構性」が財・サービスという真の「現実性」を支配するという「倒錯した」資本主義経済社会を理解するためには「貨幣システム」をベースにした「貨幣・金融システム」論へと向かわなければならない。

IV マネー論からマネーキャピタル論へ

～貨幣・金融システムの「虚構性」と「現実性」～

かつて筆者はもう4半世紀以前に「金廃貨」論に象徴される岩野茂道の現実を直視する柔軟な思考に洗脳されて、過渡期のマルクスの歴史的残滓の呪縛から解放された。それから4半世紀、楊枝嗣朗の精魂傾けた『資本論』歴史研究批判から皮肉にもマルクスの『資本論』の神髄、「物象化論」に覚醒された。歴史の逆説を僭称したくはないが筆者の個人史におけるささやかな逆説ではある。

すでに述べたように、両氏が積極的にそう主張しているわけではないが、筆者の解釈ではこの「システムマネー論」、「イマジナリーマネー論」の「虚構性」にこそマルクス「物象化論」の理論的徹底、深化がある。システム化、イマジナリー化した「貨幣システム」であるがゆえに最も強靱で、柔軟性に富む貨幣システムとして機能しうる。「貨幣システム」のシステム性、イマジナリー性という「虚構性」が現代資本主義の成長を支えてきたのである。しかし、イマジナリーな「銀行システム」が社会的再生産を媒介するというだけでは貨幣供給の弾力性を言いうるに過ぎない。イマジナリーな貨幣システムの基礎で「マネーキャピタル」が形成され、「マネーキャピタル」の集中と配分を担う金融システムが大きな役割を演じるとき貨幣・金融システムは現代資本主義のダイナミズムをよく媒介しうるのである。

『資本論』は言うまでもなく、第1巻「商品論」、「貨幣論」、第2巻「社会的再生産論」、第3巻「信用論」で構成されている。第1巻の核心、「価値形態論」が「商品貨幣論」に帰結しては価値形態論、貨幣論は未熟で理論的課題を残すが、第3巻「信用論」は「貨幣の前貸し資本の前貸し」、「貨幣資本と現実資本」という重要な視点を提示しているが、この視点は理論的には十分評価されず、未熟な研究水準に留まり課題を残してきた。しかし、このテーマは「システムマネー論」、「イマジナリーマネー論」の新たな概念を基礎にすれば「マネーキャピタル論」という新たな概念で展開するのが適切であるように思える。

楊枝イマジナリー貨幣論はこの新たな理論展開を展望すれば現在のところ貨幣論レベルに留まっていると言わざるをえない。元々楊枝の貨幣研究は従来マルクス学派貨幣論で

は現代の貨幣・金融問題が解けるのかという強いいらだち、現代を理解、解釈したいという強い意欲に発するものであった。その初心を貫こうと思えば、楊枝の研究は貨幣がイマジナリーマネーであるというだけでなく、貨幣システムをベースにした貨幣・金融システム全体の重層的構造が「イマジナリー」化しているという認識に向かわざるをえない理論的性格をもつものである。

こういう視点、理論的展望からすれば、岩野が「失われた10年」時に「銀行システム」に「公的資金」が導入されたことを問題にしたことは「マネーキャピタル論」にかかわる鋭い直観である。しかし、公的資金問題はマネーの問題か「マネーキャピタル」の問題かが重要なポイントである。重要なことは「公的資金」は日銀がマネーの供給によって対応したのではなく、政府が税金を資金源として対応したことである。公的資金の導入は銀行の流動性危機に対する対応ではなく、単にその問題であれば中央銀行の裁量と能力の範囲内である。近年の国内外の金融危機は中央銀行はますます国家との対比で言えば基本的に「通貨問題」「マネー問題」の責任者であることを鮮明にした。また、この度の金融危機は、「ペイオフ問題」を通して、中央銀行は「決済性預金」、「マネー」の管理責任はあっても、「貯蓄性預金」、「マネーキャピタル」の管理責任を負わないことを制度的に明確にした。公的資金の導入問題は直接には貨幣と国家の関係を論ずるテーマではなく、国家と信用を論ずるテーマである。中央銀行が自己資本改善のための「公的資金」を注入しないことが中央銀行の「中立性」の証しであり、そこに「銀行原理」のディシプリンが機能している。米国のS&L、LTCM、国際通貨危機の諸問題も同様に連邦政府と連邦準備制度理事会がそれぞれの「原理」にしたがって役割分担を果たしてきたことを示している。公的資金投入は戦時に見られたような国家権力による中央銀行引受の資金で強権的になされたわけではない。国民経済的な信用関係の枠組内で処理されることを予定してなされ、すでに公的資金見返りの株式の銀行による買い戻しによって国民的負担問題は解消されつつあることも周知の通りである。

もちろん、「銀行原理」も国家の社会的再生産へのより強い関与の下で貫徹しているとも解釈できる。しかし、問題は現代資本主義の下では社会的再生産はすでに「銀行原理」に基づく「貨幣システム」のみで媒介されているわけではないことである。すでに現代資本主義は高度な大衆貯蓄を基盤とする「マネーキャピタル」を管理・運用する「金融仲介システム」の媒介なしには存在しえない。「金融仲介システム」は「貨幣システム」の外に独立して存在しているわけではない。しかし、「貨幣システム」に還元できるものでもない。「貨幣システム」の中で形成され、累積する「マネーキャピタル」を直接的基盤として、「金融仲介システム」は機能する。

ヘッジファンドに代表される「金融仲介ファンド」は「リバイアサン」のごとくおそれられている。しかし、資本主義の高度の生産力を推進し、「グローバリゼーション」を牽引するものは巨大な虚構としての「貨幣・金融システム」であり、就中「マネーキャピタル」の力である。「虚構的なものこそ現実的であり、現実的なものこそ虚構的である。」

引用文献

赤瀬川原平 『ふしぎなお金』 毎日新聞社、2005年。

岩野茂道 『金・ドル・ユーロダラー～世界ドル本位制の構造～』 文真堂、1984年。
『貨幣と国家－クナップの銀行券について－』（『地域経済政策研究』第8号、
鹿児島国際大学大学院経済学会、2007年。

楊枝嗣朗 『貨幣とは何か？－『歴史のなかの貨幣』序章－』、佐賀大学『経済学論集』
第39巻大6号、2007年。

黒田明伸 『貨幣システムの世界史＜非対称性をよむ＞』 岩波書店、2003年。